

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際微生物学連合
	英	International Union of Microbiological Societies (略称 IUMS)
	団体 HP (URL)	http://www.iums.org (日本学術会議が加盟していることの記載 有) 学術会議 IUMS 分科会委員と総合微生物科学分科会委員が理事である日本微生物学連盟 (http://fmsj.umin.jp) として加盟することを学術会議と合意している。メンバーリストには、Federation of Microbiological Societies of Japan (representing Science Council of Japan) と記載されている。
国際学術団体における最近のトピック (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)		1927年に前身が設立され、現在は the International Science Council (ISC) のメンバーとして活動している。国際的非政府組織として国際微生物学連合 (IUMS) は、他の国際組織 (国連、ユネスコ、WHO など) とコンタクトを取りながら微生物の研究を促進している。2014年に部門の再編が一部行われ、現在は Bacteriology and Applied Microbiology, Mycology and Eukaryotic Microbiology, Virology の 3 Division で構成されている。国内においては、本分科会と総合微生物科学分科会と合同して、名古屋議定書 (「生物の多様性に関する条約の遺伝資源の取得の機会及びその利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分」に関する名古屋議定書) を日本がこれから批准する前に、批准がもたらすインパクトを微生物学研究推進の立場から意見をまとめ、日本学術会議の提言として23期に発出した。第24期には、新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、2010年5月に日本微生物学連盟として、「新型コロナウイルス感染症に関する声明」を発表。さらに、第25期には加盟学会を通じて COVID-19 関連情報や提言等の発出を行なっている。
当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例		IUMS2020 国際会議においては、新型コロナウイルスに関して特別シンポジウムを組むなど、世界における最新の知見を共有しウイルス学・免疫学や公衆衛生学分野の進歩に貢献している。
政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等		微生物の生物兵器利用に対して警鐘を鳴らし、IUMS Code of Ethics against Misuse of Scientific Knowledge, Research and Resources を 2008年にいち早く制定して、バイオセキュリティーに関する啓蒙を行ってきた。コロナ禍では、2022年5月に「新型コロナウイルス感染症に関する声明」をホームページに掲載し、感染症対策および微生物学教育の重要性を訴えた。 また、設立者名を冠した賞 (Arima Award for Applied Microbiology と Stuart Mudd Award for Studies in Basic Microbiology) をもうけ、微生物学の発展に大きく寄与した研究者に授与し、IUMS 国際会議に招待して記念講演をお願いしている。Arima Award は、IUMS の元会長 (1986～1988) の有馬啓・東京大学元教授の夫人の支援で設立された。
日本人役員によるイニシアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった		永井美之氏 (20期連携会員) が2008年から2011年に副会長を務めたほか、2011年9月に日本微生物学連盟理事長であった野本明男氏 (20-21期会員) を主催団体代表、富田房男氏 (21-22期連携会員) を国際組織委員長として、札幌で IUMS2011 国際会議を開

事例	<p>催した。2011～2014年には、河岡義裕教授（東大）（第22-23期連携会員、第24-25期会員）が理事としてウイルス部門の議長を務めた。富田房男氏はまた Ambassador（2011～2014年）として微生物学の啓蒙に勤めた。最近では鎌形洋一研究戦略部長（産総研）（第23期連携会員）（2015～2017年）と中川一路教授（京都大学）（2017年～2022年）（第24期連携会員）が一般理事としてIUMSの運営に携わっている。シンガポールで開催された国際会議には、日本から桑野剛一久留米大学教授（23-24期連携会員）、鎌形洋一氏がプログラム委員として参加した。本学術団体の委員会等で微生物の世界統一分類基準を採択していることから、日本人科学者が傘下の委員会メンバーとして、微生物の正式名称や分類システムを多く提案してきた。</p>
当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化	<p>IUMSは全世界において微生物学や感染症の研究を促進し・支持すると共に、研究者間のコミュニケーションを促進することにより、人類の健康の増進と環境の福祉のための活動を行っている。世界的には微生物学が学問として確立されており、大学などの教育機関に微生物学部存在するが、国内では、基礎生物科学・医学・農学・食品科学の多岐にわたって、それぞれの領域でバラバラに教育されており、全体を統一して教育あるいは学術について論議する場がなかった。感染症や食品加工において微生物が重要な役割を果たしているにもかかわらず、高校や大学の一般生物学の中で微生物学に割かれる時間は非常に少ない。平成19年に日本微生物学連盟を設立して、関連するすべての関連学会が一堂に会して微生物学の啓蒙と学術の進展に寄与できるようになった意義は日本にとって非常に大きい。さらに本連盟の設立によってIUMS分科会を通じて、日本の微生物学関連研究者がIUMSに対応できる体制が整った。本連盟が主催団体となって2011年9月に札幌でIUMS2011国際会議を開催した際は、震災直後であったにもかかわらず海外から多くの微生物研究者が参加し、国内の多くの研究者、特に若手研究者が国際的に活発な研究交流を行うことができた。</p> <p>第23期と24期において国内では、本分科会は日本微生物学連盟とともに、微生物学の最新の研究紹介と微生物学の面白さについて一般市民と高校生や大学生を対象として公開講演会を年1～2回行っている。2014年には「微生物～知られざるミクロのエンジニア」、「薬が効かない感染症の話」、2015年「ユネスコ無形文化遺産「和食」とそれを支える微生物」及び「長寿社会における感染症への対応～元気なお年寄りであり続けるために～」、2016年「人類は感染症を克服できるか」、2017年「微生物：変わり者達の素顔」のフォーラムを、2019年「Remarkable diversity and uniformity of viruses, 様々なウイルスの世界」、2022年「微生物の探索から生まれる技術」、2024年「微生物は地球の救世主になれるか？」を関連学術団体と合同で日本微生物学連盟が主催して行なった。第26期も同様の企画を継続する。こうした企画は関連学術団体が日本微生物学連盟の元で連携して初めて可能となっている。参加者のアンケート調査でも最新研究成果を分かりやすく紹介していると好評価を得ている。</p> <p>日本からはIUMS傘下の国際原核生物分類命名委員会に委員を送り出しており、その影響力を維持している。</p>

その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）	2年に1回開催される国際会議に参加する優秀な若手研究者・女性研究者を選考して旅費の支給をおこなっている。
---	--

2 今後の予定について（内規第11条 活動報告）

総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）	次回総会、理事会は2026年11月にリスボン（ポルトガル）で開催予定。2011年9月に札幌で開催されているため、当面日本での開催予定はない。
日本人の役員立候補等の予定	2026年総会に向けて今後検討する。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き	特になし。

3 国際学術団体会議開催状況（内規第11条 活動報告）

総会・理事会・各種委員会等の状況（過去5年間及び今後予定されているもの）	総会開催状況	2024年（開催地：フローレンス・イタリア）、 2026年（開催地：リスボン・ポルトガル）開催予定			
	理事会・役員会等開催状況	2024年（開催地：フローレンス・イタリア）、 2026年（開催地：リスボン・ポルトガル）開催予定			
	各種委員会開催状況	年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、			
	研究集会・会議等開催状況	年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、 年（開催地： ）、			
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	2024年、国際会議（フローレンス・イタリア）、100人以上（代表派遣：なし）				
国際学術団体における	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別	

日本人の役員等への就任状況（過去5年）	Executive	2017～2022	中川一路	（ 2 4 期）連携
		～		（ 期）会員・連携
		～		（ 期）会員・連携
		～		（ 期）会員・連携
		～		（ 期）会員・連携
		～		（ 期）会員・連携
出版物	1 定期的（年 数回） 主な出版物名 International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology, World Journal of Microbiology and Biotechnology, International Journal of Food Microbiology, Mycopathologia.			
	2 不定期（3-4年に一回） 主な出版物名 The international committee for taxonomy of viruses report.			
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 (https://iums.org/index.php) 2023年の会計報告は以下にリンク (https://iums.org/media/foto-articoli/91/varie/IUMS%20Financial%20Statements%202023%20-%20signed.pdf)				

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IUMS 分科会
	委員長名	野田 岳志
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 日本学術会議総合微生物科学分科会及び日本微生物学連盟と合同で以下の活動をしている。 令和6年7月10日分科会委員長・副委員長・幹事の選出 令和6年8月6日今期の活動方針の策定、1年目の活動審議及びフォーラム等企画審議
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である ① 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.iums.org/index.php/homepage/organization)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か） ① 該当する 2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.iums.org/index.php/regular-iums-members)	
	下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）	
	ア 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの	
	イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの	
	① 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの	
エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの		
10 ヶ国を超える各国代表会員が加入している ① 該当する 2. 該当しない		
加入国数及び 主要な各国代表会員を 10 記載	(63 ヶ国) ・各国代表会員名／国名 Canadian Society of Microbiologists/Canada, Chinese Society for Microbiology/China, French National Committee/France, Gesellschaft für Virologie/Germany, Indian Association of Medical Microbiology/India, The microbiological Society of Korea/Korea, Russian Microbiological Society/Russia, Singapore Society for Microbiology and Biotechnology/Singapore, Biosciences Federation/UK, US National Committee for Microbiology/USA	

(参考)

国内関係学協会（主要23団体）

日本ウイルス学会、日本エイズ学会、日本細菌学会、日本食品微生物学会、日本農芸化学会、日本微生物資源学会、日本微生物生態学会、日本医真菌学会、日本菌学会、日本植物病理学会など23の学協会が加盟。